

10

イセリア 英雄戦記

the legend of the Acera war

編集 二次元ドリームマガジン編集部

挿絵 牡丹



立ち読み版

セリーヌの右手が、目にも止まらぬ速度で振られた。

ズガッ！

黒い刀身の半ばまで石畳に食い込ませ、フィオナの進路を断つたのは、セリーヌの愛刀である魔剣クラウソラス。

「瘴気結界、展開ッ！」

轟ッ！

刀身から噴き出た黒い瘴気が壁となってフィオナとセリーヌを包み込み、精霊装甲と分断する。

「ああっ！」

「そおら、捕まえたッ！しばらく見ないうちに、お前の乳は、また大きくなったんじゃないか？」

無念そうな呻きを漏らすフィオナを背後から羽交い締めにしたセリーヌは、たわわな乳房を鷲掴みにして動きを封じた。

「くああうッ！ いっ、痛いッ！」

黒いアーマーに包まれた指を、乳肉にギチギチと容赦なく食い込まされた姫は、白くたおやかな裸身を振らせて苦悶の声をあげる。

「精霊装甲を着たお前と正々堂々戦い、力づくでねじ伏せてやつてもよかったが、勢い余って殺してしまつては、元も子もないからな」

量感たっぷりな果肉に指を食い込ませて荒っぽくこね回しながら、セリーヌは熱い吐息混じりに囁きかける。

「だから、快楽責めにして墮としてやる。覚悟しろ。ククククッ」

「くあ、あううつ、お願い、正気に戻って！ 今のあなたは魔王の力で操られているだけ……そうなのでしょう？」

「お前ならそういう戯れ言を口走ると思った。実に浅はかで、短絡的な思い込みだな、フイオナよ」

必死に顔を振り、悲痛な声で呼びかける姫に、魔に墮ちた女騎士は冷笑で応えた。

「よく聞け、私は我が君に心酔し、自らの意思で后となることを決めたのだ」

「魔王の后に、ですって!?!」

フイオナの顔が、ギクリ！ と強張る。

「そうだ。お前もじきに、我が君の所有物になる。この身体も、心も、親友である私が直々に嬲り尽くして牝奴隷に墮としてやろう！」

セリーヌは、邪悪で淫蕩な笑みを浮かべ、片手に余るサイズの乳房を鷲掴みにして責め立てた。

ぎゅむつ、むぎゆるつ、ぎちつ、ぎしつ、ぐりゅんつ！

「くはあう、やつ、やめ……やめてッ！ セリーヌッ、つああ、んくうううんつ！」

黒い指先が白い果肉を縦横無尽に揉み嬲り、フイオナの顔を苦悶と辱悦に歪ませる。

「おやおやフィオナ、抗いながらも、乳首をこんなに硬くして……クククッ、お前の身体は、すっかり犯され癖がついてしまったようだな」

漆黒の墮天装甲に包まれた指が、鮮やかなピンク色に充血してしこり勃った乳首を摘んでクリクリと揉み転がす。

指の間で引き延ばされた乳頭は、さらに硬度を増し、乳輪共々鈍痛を感じるほどに充血していた。

「ほら、どんどん硬くなる。まるで小さなチンポみたいにいやらしい乳首だな」

ぎゅりっ……ぎゅむるっ！

サディステイックな笑みを浮かべた女騎士の指が、痛々しく尖り勃った乳首を容赦なく捻り上げる。

「くうんっ！ セリーヌっ、こんなことやめて！ くあんっ！ やああんっ、乳首、ねじ切れちゃうッ！」

「案ずるな、ねじ切れる寸前でやめてやる。フフッ、痛いのも感じるようだな。発情臭が濃くなってきたぞ」

ギチギチと捻り上げられた乳首が血の気を失って白っぽく変色するまで責め立てながら、セリーヌはフィオナのうなじに鼻先を押し当て、ほのかに立ちのぼり始めた甘い淫臭を嗅ぐ。

「そろそろ限界まで捻れたかな？ そおら、こういうのはどうだ？」



「フフ。媚毒が効いてるとはいえ、こんなちっちゃな尿口を拡張されて感じちゃうのねえ、さすがは、大騎士団長様つてところですか？」

「ば、馬鹿にしているにやっ……ん、ひいんっ……」

——潜り込む金属棒が、膀胱の入り口を押し開き「ひにやあつ」その先端が、小水袋の奥にまでずんと追突してきた。

「にやひいひいっ——ッ！」

痺れるような快悦に、ビクビクビクっ！ とミーシャの身体が跳ね上がる。

「はい。あなたの、尿道口の処女も、破っちゃいましたわ。ふふふっ」

「そ、そんな、にやあつ……。ひいっ！ う、動かすにやっ、ふにやああつ！」

スレアが左右に棒を腰を動かすと、途端に牝猫ミーシャは可愛らしい鳴き声をあげて瑞々しい太腿を左右に揺らしわなないた。

「あ……あ、にや、ああ……」

ヴァギナや肛門を貫かれた時ともまた違う、雷撃の魔術を食らったみたいな痺れが身体中を甘く駆け抜けていく。

火傷したみたいにおしっこの孔が熱くて。

どく、どくと……鼓動の度にそこから、切ないような官能が突き上げてく。

「はあい、それじゃあもつと、この孔開いちゃいましょうねー」

と、スレアは棒を揺り動かす。

右に左に上に下に、ずにゆるつ、にちゆりつ、にちゆにつちゆつ！と。

「ぎゃひいつ……！ ひ、ひいっ！ やめ、キツいつ、にゃああんっ」

華奢な両脚がひくんつとはねた。眉元に皺を浮かべて首を振る、牝猫の瞳に溢れる涙。その涙をぺろりと舐めて、スレアは愉しげに笑うのだ。

「ウフフ。こおんなちつちやな身体なのに、おしっこの孔、ズボズボされるのがだあいすきなね。牝奴隷に相応しい牝孔なのですね」

「言うニャ……いや、言うニャあ」

ふる、ふると……顔を赤くしてミーシャは首を振る。

(こ、これ……ヤバイにやつ……)

身体のすべてを引き裂くような拡張感がクセになりそうだ。おしっこの溜まった膀胱の中をぐるぐると金属棒がかき混ぜて、そのひりつく痛みすら快感へと変わっていく。

「あひゅいつ……おひっこのあな、あひゅいのにいつ！ どうして、こんなにやの……きもちよくなるにゃあっ」

「それはもちろん。あなたがえつちな牝猫だから、ですわ。フフ」

ほっそりとした腹腔の下に咲く、あまりに小さく未成熟な尿道口。そこをおぞましくも押し開いた金属棒を、スレアの指がこつこつと叩いた。

「あにゃにやつ!! ひにゃにゃ!」

頭のとっぺんまでずーんずーんと響き渡るその衝撃に、ミーシャの薄胸が反り上がり、

眈は垂れ、口の端から涎を吐き散らす。

「いい反応。可愛いですねー」

全身を紅に染め、被虐の汗にまみれて、猫耳少女は尿道陵辱の官能に啜り泣いている。そんな彼女の小孔を犯す、金属の棒を錬金術師がひとつ撫でた。

その瞬間——金属棒がウネウネと、身を振らせたのである。

「ひぎっ!? ふにやにやにやにやっ!? ひにやああ~~~~~~~~ッ！」

おしっこの道が破裂してしまいそうな蹂躪。

脳まで焦がす衝動が猫耳少女の身体を激しくくねらせる。

うにゆるんっ、にゆるうにゆるっ! にゅちゆる、にゅちゅうう!

「ふにヤッ、にやああっ! 動いてるっ、うごいてっ……!! ひいっ!」

——ああ、そういえば。お尻を犯した魔道具も、ひとりで動いていたか。

「ああもう、暴れないでくださいな」

媚毒で力を失っている、ミーシャを抱き留めておくのに、スレアは手を余らせているようだ。それほどに牝猫はM字開脚の恥ずかしい格好で激しくのたうっていた。

「くひいっ、ひにや! ひ、ひいっ! やぶれ、おひっこのところやぶれひやうっ! に

やん、んにやあんっ」

それはまるで尿道口に鉄色の芋虫が潜り込もうとでもしているような情景であった。

ウネウネ動く鉄の棒、肉袋のあちこちにその先っぽが衝突して、その度に蕾のように青

い肢体を花開かせる、熱い肉悦が貫いていく。

「ふぎゃっ！ にゃひっ！ くひっ」

括約筋が反応して、ヴァギナも肛門もムニムニと蠢いていた。大きく開いたおまたから、突き出す自動の棒。それをスレアが掴み直して。

「ほおち子猫ちゃん……！ もっといっぱい鳴きなさいなっ」

そうして悪辣な錬金術士は棒を前後に動かし始めたのだ。

「ひにゃ、にゃあああああんッ！」

金属棒を引かれれば狭隘な尿道口が捲れ反って、マンコからぷしつと愛液が飛び出す。そうしてぐつと押し込まれれば、ゴツンと膀胱の内壁が打ちつけられて、背骨を痺れさせる快感が脳にまで駆け上る。

「お……おひつこのあにゃあつ！ しゅごつ、しゅごい、にゃあつ！ ひいはずぼずぼおつ！ はひいっ！ やけりゅうううっ！」

「フフ。ちっちゃなおまたが緩んでいますよ？ だらしのない騎士さん」

スレアのせせら笑う通り、牝猫少女の両脚はかばあつと展開しきってして、その尻は尿道責めを貪るようにへこへこと動いていた。

「にゃああつ！ にゃあああんつ！ らめ、らめにゃあつ！ くひいっ！」

涙と鼻水すら垂らして、猫耳少女は童のごとく噎び泣く。

ぐじゅっ……ぐじゅっぽ！ ずっぽそぼじゅ！

「はにやつ！ はっひ、ひにやつ！」

細い尿孔が摩擦される度、小柄な身体は軽々とはねる。

「あら。可愛いおムネが頑張つて勃起してますわ」

とスレアの指が、発育途上の可憐な乳房へと伸びる。そして茱萸のように膨らむ肉粒を、きゅ、と摘み上げた。

「にやあああつ！」

猫耳と尻尾とがぴくんと揺れて、甲高い鳴き声は媚を含んですらいた。

「らめつ、いまむねらめにやあああつ！ あたま、ごわれるにやあああつ」

気持ちよすぎて——もう、狂つてしまいそうだ。

肉体が欲している。もつと擦つてと。もつとこの小さな孔を、好き勝手に穿つて、快楽を感じさせてと。

「ひにやあんつ、にやあ！」

金属棒が何度も何度も出し入れされて小さな身体をかき回す。

汗まみれの肢体が艶めかしく踊り、脚指が開いて閉じてを繰り返す。

「ほらほら、イッチャいなさい。おしつこの孔で絶頂しなさいっ！」

ずぶぐちゅ！ にちゅぐッ！ ずぶちゅぶちゅ！ ぐっちゅぐっちゅ！

抽送が激しさを増して、赤く爛れた尿道口を責め立てる。

じゅぽぐじゅぽぐちゅにぐちゅる！



「え？ な、何を……ああッ!？」

フィオナの膣を満たしていた触手の先端が、子宮孔へとグプリッと入り込んでくる感覚に背筋が震えた。

クリトリスに巻きついている細い触手のように、魔王の触手が自在にその形を変え胎内にまで侵入してくる。

「う、嘘でしょ……そんな……そんなところまで……そんな深いところまで……一番犯してはダメな……と、ところまで……」

——トンッ。

と不意に己の腹を内側から、急成長した赤子に蹴られた。

初めてのその経験に、心臓がドキッとはねる。こんな時だというのに、我が子に対する深い愛情を強烈に実感させられる。

「や、やめてください！」

母としての本能が覚醒し、心の底からそう絶叫していた。

「この子にだけは何もしないで！ お願い！ この子だけには！」

しかし、そう哀願している相手は魔王である。こちらの悲痛こそが喜びで、むしろこれでは『もつとして』とねだるようなもの。

頭では、それがわかつている。

なのに母としての本能が叫ばせる。

「お願い許して！」

と。

「母子共々、人為らざる悦楽——魔の喜びを教えてやろう」

「ああ……いや、いやああああ！」

ピリッと身体が一番深いところに痛みが走った。

魔王の力によって急速に成長させられたからなのか、ヘソの緒で繋がる胎児の感覚が、今、はつきりと認識できている。

先ほど自分の腹を内側から元気よく蹴った足が触手に絡まれ——。

「くひいっ！」

その幼すぎる股間の割れ目に、ぬるり、と別の触手が這った。

脳裏に己が処女を散らされた時の記憶が再び蘇る。

イセリアの血筋ということは、処女を捧げた相手の命令には、今後、絶対服従——なのだろうか？

生まれる前からその身を犯され、そして魔王の言いなりになるかもしれない人生。

そんな重すぎる十字架を、我が子に背負わせるかもしれない絶望感に、目の前が本当に真っ暗になった。

その直後——ズぬるるるるッ！

「ああああああああああああ！」

身体のもつとも奥深いところから迸ってきた肉悦の閃光に、絶望の暗闇がピンク色に引き裂かれる。

これは……胎児が魔王に犯されて得ている快感か!?

自分が得ている快感と、我が子が得ている快感が重なりあい——己ひとりが受け止めきれぬ快感の許容量をたやすく超えてしまう。

ぶじゃあああああああああ!

派手に潮をぶちまけながら、あつという間に絶頂してしまった。

「はふああッ……つぐふああ!　ら、らめ、そんなに続けて……ずっとは……あああああ
あああああ!」

しかし魔王による母子同時の触手陵辱は始まったばかりだった。

これまでの二倍の快感量と、我が子が腹の中で犯されている過去最悪の絶望感に、頭がおかしくなりそうだと。

「コレ、しゅごいいい!　気持ちよすぎておっぱい止まらないのおおお!」

そんな時、己の上半身に生温かな飛沫を感じ、視線をそちらに向けてみると——セリ—
又が母乳を噴き散らしながら激しく喘いでいた。

そして自分の乳首からも同じように、触手の動きに合わせて、糸のように細い母乳が四方八方に噴き出ていることに気づく。

「くひい!　これもイイツ!　お腹ヌルヌルも気持ちいいイイツ!」

セリーヌはふたりのミルクで濡れ光るお互いのポテ腹をヌルヌルと擦りあわせて、極限の愉悅に浸りきっている。

「ああっ！ ふいおなああ！ もつとふたりに一緒に気持ちよくなろお！ ううん、お腹の赤ちゃんも四人で、魔王様にもつともつと気持ちよくさせてもらおおおおッ！」

男の子を孕んでいるというセリーヌは、一体どんな快感を得ているのだろうか。

自分のように女ふたり分ではなく、男女の快感を同時に味わっているのかもしれない。

「これが人の性よ。己が肉欲を極めるためならば、我が子も友も進んで貪る。人が日ごろ、徳だ、正義だ、倫理だと声高に口にするのは、たやすく快に堕ち、淫に溺れるこの性故だろう」

そんな人の堕ちきった姿こそ、魔王の欲情ポイントに違いない。

ドクンドクンと鼓動のようなタイミングで硬軟を繰り返し、フィオナの膣内を責め続けている触手が、その硬度を一気に増した。

ぐちゅん！ ぐちゅんぐちゅん！

ヌルぐちゅんぐちゅん！

そうして激しくくねり出した触手の動きは、人間の男の絶頂間近の突入に酷似していた。そして膣内を扶る触手肉の形状も、さらに凶悪なモノへと変化していく。

男性器のように先端は龟头状になっているのだが、竿肌の部分に硬いイボのようなモノが無数に生まれている。

「ああああ！ そんなああ！」

肉カりに膺壁の弱いところを責められるだけでなく、その大小様々な盛り上がりまでにまで連続して擦られる。

まるで膺壁一枚一枚が、個別のペニスと同時に犯されているような快感に、頭がおかしくなりそうだ。

たまらず背が弓反って、上のセリーヌとミルクまみれのボテ腹を激しく擦りあわせることになる。

「あああ！ またイクウ！ イッチャウウウ！ すごいきちゃウウウ！」

魔王と交わりすでに何度もイッているが、今までの中でも最高の——人生最大の官能の大波が、己の奥底から競り上がってくる。

「ほうれ、イセリアの牝どもよ！ 我とともに果てるがいい！ 人の世では決して得られぬ性の極みを味わわせてやろう！」

魔王は一際深く触手を突き入れ動きを止めた。

その股間から伸びている触手の付け根が、人間の拳ほどの大きさに膨れ、それがものすごい勢いで触手の内側を直進し——。

ドギユドぶどぶドプツどぶっん！

凄まじい量と勢いの粘液が、我が子の宿る子宮の中へとぶち込まれる。

ブシュぶしゅどドギユどぶん！



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!



電子書籍も配信中!

2D DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



大人気PCゲームのコミック多数連載!



コミック UNREAL

ヒロインピンチDX

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。